① 坂の下の三本杉

曽て、仙南村金沢の溝田と味噌田の境の辺りに、寺田の「三本杉」と俗に呼ばれていた、大きな杉の木が聳え立っていた。然し、なぜか往昔の頃より、此の杉の木の実際は二本のみであったとのこと。此の理由について里の古老が語るには、元々此の地は坂の下の真宗寺・正流山圓徳寺（詳細後記第十章参照）の古寺跡の近くに位置し、昔から仏縁の浅からぬ地とも伝えられている。昔の事、金沢字立石の樵某が六郷での仕事を終えた帰り道、此の三本杉へ差し掛かった時のことです。ふと見ると杉の木の根方に、一人の旅の僧らしき男が立っていた。時は既に辺りが闇に包まれていた頃のことなので、吃驚した樵は提灯の明かりを翳して確かめたところ、此の男は胚に提灯を結びつけ、衣の裾で尻の辺りを括り、更にその上を荒縄で固く縛った姿で、唯只管に念仏を唱えながら合掌していた。

此の異様な身なりを不思議に思った樵は、薄気味悪かったが「おや、坊様ぁーお前何して居るところだのよ？」と思い切って訊ねると、その男は唯「これ即ち第十八の念仏、往生の誓願の心なり。斯くの如く決定しての上には、寝ても覚めても、命のあらん限りは、称名念仏すべきものなり。あなかしこ、あなかしこ」と何やら難しいことを言うので、樵は「おらぁー頭悪くて何が何だかさっぱり判らねぇがら、もう少し簡単に解いて教えて戴けねぇべがー？」と言ったら「所謂、此の言葉は真宗の『お文』の中の一説で『人間が阿弥陀仏を唯只管に頼んで、浄土へ生まれ変わろうと願うならば、現在の命があるうちに、懸命の念仏を唱えるものである』と言う仏の有り難い教えだ」と説いてくれた。また此の男はこれに続けて「だから俺は此の決定一念の願いを、今のうちから弥陀仏に頼もうと思い立ち、ここに尻を固く結んで決定の願いの証しとし、提灯で足元を照らして此の世の中に生かされる現在への感謝の心を現し、懸命の念仏を唱えているところだでやー」とも教えてくれた。樵は未だ完全に納得した訳ではなかったが、兎にも角にも有り難いお仏様の教えを戴いたような気がして、「では此の儘で坊様を見過ごしては罰が当たるかも知れねぇ、幸いここに生えている此の三本杉を『見過ごす』の言葉に譬えて、此の『三本杉』の中の一本を伐り取って二本にし、お坊様を見過ごさなかった証とするべぇー」と言いながら背中より鋸を降ろし、三本杉のうちの一本を伐り取ってしまったそうだ。以後、此の立石の樵某は、深く此のお坊様に帰依して一向念仏の一生を送ったと伝えられている。